

オーディオ実験室収載

音源の比較試聴(46) —マーラーの交響曲第5番—

1. 始めに

前報(45)に引き続き、各種音源の再生経路に関する仮想アースとアースアキュライザーや OPT ISO BOX や LAN iPurifier Pro などを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

アナログ関係の対策の経過は前報(27)でも述べたとおりで、配信や CD 再生の光アイソレーションなどの対策は fidata HFAS1-S10 の活用シリーズや OPT ISO BOX の導入シリーズや LAN iPurifier Pro で報告してきました。

今回、同じ曲のアナログ盤と CD と STAGE+からの配信を比較試聴します。

アナログ盤は下記を使用します。

DECCA 6.48110

グスタフ・マーラー 交響曲第5番

ズビン・メータ指揮ロスアンゼルスフィルハーモニー

CD は下記を使用します。

RCA BVCC-3715

グスタフ・マーラー 交響曲第5番

デヴィッド・ジンマン指揮チューリッヒトーンハレ

配信は STAGE+とベルリンフィルデジタルコンサートホールから上記と同一の曲を選択します。

グスタフ・マーラー 交響曲第5番

アンドリス・ネルソンス指揮ウィーンフィル

グスタフ・マーラー 交響曲第5番

レナード・バーンスタイン指揮ウィーンフィル

グスタフ・マーラー 交響曲第5番

グスター・ボ・ドウダメル指揮ベルリンフィル

それぞれの音源は、下記の経路で聴いていきます。

アナログ盤

LINN LP-12→ZANDEN Model 12→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

CD

EMT981→TruPhase(B)→TruPhase(A)

STAGE+およびベルリンフィルデジタルコンサートホール

ルーター→スイッチングハブ→PC→Brooklyn DAC+→TruPhase(A)

3. 音源の比較試聴結果

アナログ盤は、レベルに対応したイコライザ特性で聴いていきます。

アナログのメータ指揮ロスアンゼルスフィルハーモニー盤は、1977年の録音で、DECCA盤ですが、ジャケットにはTELDECスタディオで録音との記載があり、フォノイコはTELDECカーブに設定しました。トランペットの莊重な出だしから始まって、悲劇的な表情が展開し、続いてホルンや金管の混迷する状況があり、静かな沈潜的な表情から、木管の明るい掛け合いから躍動的な終章を迎えます。総じて、切れ込みがよく見通しの良い音です。

CDのジンマン指揮チューリッヒトーンハレの演奏は、重厚な演奏で悲劇的な表情が展開していきますが、上記のアナログに比べるとエッジがたった音です。

STAGE+の配信のネルソンス指揮ウィーンフィルの演奏は、2022年のザルツブルグ音楽祭の収録で、ウィーンフィルらしい弦や木管の柔らかな音色と深みと厚みのあるオーケストラの迫力が聴きどころです。下記のバーンスタイン指揮の演奏に比べれば、現代の標準的な演奏という印象です。

STAGE+の配信のバーンスタイン指揮ウィーンフィルの演奏は、画像も鮮明でなく、音質も良くはありませんが、楽友協会大ホールの演奏で、ウィーンフィルらしい悲劇的要素の情緒的な表現もある重厚な演奏です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールの配信のドゥダメル指揮ベルリンフィルの演奏は、ベルリンフィル大ホールに響き渡る重厚な演奏で悲劇的な表情が展開していきますが、くっきりとした見通しの良い音で、先鋭的な演奏です。

4. まとめ

アナログ再生と STAGE+からの配信を比較してみましたが、これまでの対策で、すべてにおいてレベルが向上しており、以前のような格差がなくっており、悲劇的な要素の大きなスケール感のある、この曲の収録年代や収録環境が的確に表現されており、オーケストラやホールの音の違いがはっきり分かります。

以上